

唐松 五龍(後立山・夏山登山)

T2 岡本昭男

長野冬季オリンピック(1998年)、造られたジャンプ台、2基(ラージヒル、ノーマルヒル)が濃緑のゲレンデに輝いている。2基が並列されているのは、日本では、初めて。その傍の、八方スキーリフトで、八方池山荘登山口、



八方池

八方池経由、丸山ケルン(2,420m)、唐松岳頂上山荘(2,965m)を目指す(6.7.24)。

ゴンドラを下りると、

すぐに、雨着を取り出し、雨天登山の準備、もちろん、リックにもカバーをかける。丸山ケルン辺りから本格的な雨、登山を実行するか否かの判断が困難、決行することに兎平でも、少し考えたが、ゆっくりと登っている。あいにくの天候で、素晴らしい後立山もガスがかかり、一時



丸山ケルン

の晴れ間に、ちょっと山並みが見える程度、昨年、この後立山連峰を眺め、鹿嶋槍ヶ岳、五龍岳、白馬岳を堪能していた。

今回は、そのまっただ中



兎平

に入り込んでいながら、何も見えない悪天候、残念なり。気が付くと、登山道は、洪水の様だ、体も冷え切って、横殴りの強風を感じている、真っ白なガスや霧が目の前を



ガスに煙る連峰

走り去る。体が、震える、寒さ対策が足りなかったのか、もう引き返されたいと思うばかり、ピークを越えて、少しの下りに入ったところで、

ふと下を見ると、霧の中に山荘の赤い屋根が見えた、こんなに嬉しい一瞬は、経験がない。約5時間30分で山荘へ到着、嬉しい一瞬なり。宿泊代の支払いをしようとするが、財布もびっしょり、紙幣が取り出せない。ストーブで乾かすまで、待ってもらった。着替も含め、リックもずぶ濡れ、乾燥室に全て入れてもらい、体を温めるため、布団に潜り込む、申し訳なし、布団が少し濡れて来る、ま

だ、体が痙攣している様だ。夕食は、1840から、少し温まった。食事後、乾燥室から着替えを取り出し、着替える。また、睡眠、足が痺るのではと心配したが、幸い、何にも



唐松岳山頂

なく朝を迎えた。

翌日(2日目)朝食後、唐松岳山頂へ約30分で登頂、ここで、決断、五龍岳から五龍山荘へのコースを中止し、下山す

ることにした。まさに、「関ヶ原の闘い」での、薩摩藩島津藩士の敵前突破撤退と同じなり、0900頃から、また、悪天候とのことだ。山頂を極めたことで、少し気楽に、2日目の五龍岳コースを断念、下山の決断したのは、正しい様だ。

今日は、少し、昨日と比べ好条件、天空からのこぼれ日もあり、高山植物も見事に咲いて



高山植物満開

いる。イワツバメ、綺麗な声の鶯、鶯と人の別れ(欲別頻啼四五声:漢詩にあり)、また来いよ!と、聞こえるが、足腰がボロボロ、耳だけの反応、足場の確認が大切、登山事故は下山時が多い。油断は禁物、青々とした水田



扇雪溪

地帯が遙か下界に見える。五龍岳山頂は、ガスでまだ覆われている。下山時、再び、扇雪溪を楽しめた。苦難の北アルプス山行き、これは、

将来を更に楽しませてくれる肥に、必ずなるのではないのか?今それを感じている。